

# *Lippincott's* 版「ドリアン・ 그레이の肖像」 に対する評価の検討

深 町 悟

ヴィクトリア朝後期の雰囲気としては、1870年に義務教育法が施行されことによって、英国民の識字率が向上していくなか、不道徳な読み物に晒されることで知性やモラルの低下が起るかもしれないという認識が増していた。*Pall Mall Gazette* 紙が1885年に少年の売春が流行していたことを報じたことで National Vigilance Association が誕生し、悪書を糾弾する役割を担っていたし、Henry Vizetelly (1820-1894) は Émile Zola の作品を翻訳出版したことで1888年に100ポンドの罰金刑と1889年には3ヶ月の懲役刑に課されることとなった (Manchester 2854)。そのような社会的雰囲気の中、1890年6月20日にオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の、13章構成の「ドリアン・ 그레이の肖像」 ("The Picture of Dorian Gray") は、アメリカを拠点とする *Lippincott's Monthly Magazine* 7月号の目玉として英米両国で発表された (Bristow xiii)。

この作品の内容は、絶世の美男子である主人公ドリアン・ 그레이が二人の友人との出会いによって墮落し、破滅するというものである。その友人の一人は画家バジル・ホールワードで、彼は密かに恋心を抱いていたドリアンの肖像画を描く。また、別の友人、ヘンリー・ワットン卿は快楽を求めて生きることの必要性をドリアンに説く。ドリアンはその肖像画を一目

見るなり自分の美しさに気づき、また、あらゆる快樂を経験するために生きることを決意する。彼は、肖像画の自分が歳をとらずその美しさを維持していくことを羨み、年老いて見にくくなっていく自らの運命を肖像画が担ってくれればいと願うが、その願いは叶ってしまう。ドリアンが年を追うごとに、また、彼が罪を犯せば犯すほど肖像画は醜くく変化していくのに対し、彼自身は、その絵が描かれた 20 歳の頃の美しさを維持し続けるのである。快樂を求め墮落し続ける彼は、結果的にバジルを殺害してしまうが、その内面の醜さが投影された自分の肖像画を切りつけたことで、なぜか自分自身がその傷を負い死亡してしまう。

このように青年が墮落していくというプロットから、倫理的な観点でいえばこの作品が非難されたことは容易に想像できるだろう。原稿が *Lippincott's* 誌に送られた後、編集長の J. M. Stottard らは問題になりそうな箇所を 500 語ほど改変、削除した、というエピソードからもそのことが見てとれる (Frankel 40)。2011 年にその編集前の作品を初めて世に出した Nicholas Frankel は英国での当時の作品に対する反応について次のようにまとめている。

ワイルドの小説が 1890 年の夏に *Lippincott's* 誌に出た時、主に間接的な、あるいはそれほど間接的ではないホモエロティシズムについて英国のメディアから絶え間ない攻撃の的となった。ある人の表現では『書かないほうがよかったものを書いたこと』について、英国の評論家たちはほとんど異口同音にワイルドを非難した。その結果、英国で最も大きな書店の W・H・スミスは 7 月号の *Lippincott's* 誌を駅の売店から取り除くという通常は行わない手段にでた。 ("When Wilde's novel appeared in *Lippincott's* in the summer of 1890, it was subjected to a torrent of abuse in the British press, chiefly on ac-

count of its latent or not-so-latent homoeroticism. British reviewers were virtually unanimous in condemning Wilde for what one termed 'writing stuff that were better unwritten.' ... As a consequence, Britain's largest bookseller, W. H. Smith & Son, took the unusual step of pulling the July number of *Lippincott's* from its railway bookstalls.", 39)

上記の引用からは、ワイルドが同性愛的要素を作品に込めたからという理由で、批評家たちひどい非難を受け、さらに作品自体はマーケットからも締め出されかけたと読める。このような仕打ちを受けなければならなかった、とのはいうのは今日では、少なくとも先進国では考えられない事態であろう。また、Frankel のこの言説は特異なものではなく、むしろ一般的といえる。<sup>1</sup>

この論文では、*St. James's Gazette* 紙、*Scots Observer* 紙を含む当時の新聞、批評などを概観するとともに、この作品の同性愛的な内容に対するヴィクトリア社会が過剰なまでに反応したとする言説についての検討を試みたい。また、この作品の評判を再評価する可能性を探るという目的から、ワイルド自身の考え方を分析することは控えたい。

## 1. 同性愛批判をする記事について

「ドリアン・グレイの肖像」が発表されて間もない、6月26日の *Pall Mall Gazette* 紙では、この作品の同性愛的描写について、「『輪郭のはっきりとした真紅の唇、赤裸々な青い瞳、爽やかな金色の髪』のドリアン・グレイは彼の賛美者たちと同じ性別なのである。しかし、彼らの賛美も、それを表現する様式も気持ち悪さを軽減させない。」("Dorian Gray with

his 'finely-curved scarlet lips, his frank eyes and his crisp gold hair,' is of the same sex as his admires; but that does not make their worship of him, and the forms of its expression, seem any the less nauseous." "Mr. Oscar Wilde's Dorian Gray")、とドリアンが官能的に描かれることをはっきり気持ち悪いと言っている。ワイルドがいかにこの作品を美しく描いたところで、それは無駄といった調子で同性愛的描写への嫌悪感を示すのである。

また一方で、この記事の2日前には、*St. James's Gazette* 紙が大々的にこの作品を非難している ("A Study in Puppydom")。その扱いは、酒類販売法 (Licensing Clauses) を廃止することの賛否についての論説と並び、一面にこの批判記事を掲載したほどである (実際は3ページに掲載されているが、最初の2ページが広告であるために最初の記事は3ページから始まる)。このことは、この作品の話題性の大きさを物語る一つの例といえるだろう。その記事での批判はこの作品を徹底的に馬鹿にするものであり、さらに法で罰せられることを勧めるような内容さえも含まれていた。また、同性愛を非難する箇所では「我々は、『ドリアン・グレイの肖像』を分析するつもりはない。それは少数の人に理解できる性癖の発展を宣伝することになるのだ。」 ("[W]e do not propose to analyse 'The Picture of Dorian Gray': that would be to advertise the developments of an esoteric prurience.", Ibid) とやや *Pall Mall Gazette* 紙とは違い控えめな表現にとどめている。しかし、それに続く箇所では、「大蔵省や自警協会がオスカー・ワイルド氏やウォード、ロック社を訴える価値があるかどうか考えるかは分からない。しかし、概して言えば、我々は彼らがしないことを願っている。」 ("Whether the Treasury or the Vigilance Society will think it worth while to prosecute Mr. Oscar Wilde or Messrs. Ward, Lock and Co., we do not know; but on the whole we hope they will not.",

Ibid)、からなる箇所、わざわざ Henry Vizetely が彼らに訴えられ有罪判決を受けたことを読者に想起させようとしているのである。このことについてワイルドは反論する内容の手紙を送り、新聞が検閲を推奨していると強く非難したが、この新聞社はそれを否定した上で、「はるかに問題のない性質の本の著者が大蔵省や自警協会から訴えられてきたのである。しかし、我々ははっきりとワイルド氏のこの傑作が見逃されることを望んでいると言ったのだ。」("The authors of books of much less questionable character have been proceeded against by the Treasury or the Vigilance Society; but we expressly said that we hoped Mr. Wilde's masterpiece would be left alone.", "Mr. Oscar Wilde again")、とここでも、ワイルドが訴えられる可能性が存分にあることを匂わせるのである。関係機関の固有名詞を出しているこの箇所は、むしろ彼らに訴えることの機運作りを促進しているとさえ取れるだろう。ワイルドは、倫理と芸術は分けて考えるべきだとの論陣を張っていたが、この新聞社のスタンスは、あくまで「ドリアン・グレイの肖像」は退屈で読む価値がないという前提で論じていたので、その議論は平行線だった。このやり取りは6月28日まで連日繰り返した後、7月からは9月までは自説ではなく、この作品に否定的な他社の記事の引用を繰り返すようになり、それ以降は関係する記事を出さなくなる。このように *St James's Gazette* 紙が積極的、もっといえば過度な批判記事を書かなくなったのには、ワイルドがこの新聞社の編集長と直接話をしたことが原因とされている (Ellmann 322)。

時系列的にはそれを引き継ぐ格好で、7月5日から *Scots Observer* 紙がワイルドへの攻撃を始める。これも辛辣なもので、「CID や判事による審問のみがふさわしい事柄を扱うこの物語は著者や編集者と同じく恥ずかしいものである。」("The story — which deals with matters only fitted for the Criminal Investigation Department or a hearing in camera — is

discreditable alike to author and editor.", "Reviews and Magazine")、とその内容を下劣とし非難の声を浴びせるのである。それだけではなく、上流階級の男たちが郵便配達員などをしていた男娼の少年を買っていたことが明らかになり騒ぎとなった、Cleveland Street Scandal<sup>2</sup>になぞらえ、この作品の内容について「無法者の貴族と道を外れた郵便配達少年」("outlawed noblemen and perverted telegraph-boys", Ibid) について書くことは止め、彼は才能をもっといいことのために使うべきだと語るのである。このように低俗、下劣な物語という前提からこの作品を非難している。この非難に対しても、ワイルドは *St. James's Gazette* 紙に対して行ったように、作品の芸術的価値は道徳的かどうかで判断されるべきではないとの立場から反論を試みたことから両者の議論は噛み合ったものとはならなかった。

これらの記事はこの作品の同性愛的な部分に対して強い非難をしていると読み取れるものであるし、特に *St. James's Gazette* 紙と *Scots Observer* 紙のものは刑事罰の可能性をちらつかせる脅迫的ともいえる内容であろう。また、この両紙の批判は「ドリアン・ 그레이の肖像」が同性愛的作品として攻撃されたとする研究でよく引用されるものでもある。ここまで見ていくと、この作品はそのゲイ的な要素で世間から拒絶されたかのような印象を受けるが、ほかの記事での扱いにも目を向けたい。

## 2. 当時のメディアの反応の概観

一  
二  
三  
作品の当時の評判を検討するために、*British Newspaper Archive* からドリアン・ 그레이の肖像に関する記事を調べた。テキスト検索は、"Dorian Gray" をキーワードにしたイグザクトサーチを行い、期間は1890年6月から12月までを対象とし、全325紙を横断的に検索した結果、

広告を除き合計 99 の記事が該当した。そのうち 6 月と 7 月では 77 の記事があり、8 月ではわずかに 2 つ、残りの 20 は 9 月と 10 月のものであり、この作品に関する騒ぎは作品発表以降、8 月までに関係の記事はほとんどが出尽くしている。つまり多くの批判はこの約 1 ヶ月間に集中していることになる。雑誌版のこの作品に関する騒ぎはこのように短い期間で収束したと新聞記事を見る限りでは考えられるだろう。

6 月は 31 件の記事が出ている。最初にこの作品の批評をした記事は 6 月 23 日の *Bristol Mercury* 紙である。その内容を見ていくと、「これは並外れている。そして純粋に文学作品として見たとしても今年で最も素晴らしいものの一つに数えられるといえる。」("... it is phenomenal, and judged even purely as a piece of literary workmanship it is one the most brilliant and remarkable productions of the year." "Our Literary Table")、と大変褒めている。この記事の中には苦言が全く呈されていない。翌日 24 日には、*Leeds Mercury* 紙が、「彼の作品は軽快な会話と上質な人物研究から魅力的に書かれている。そのタイトルは『ドリアン・グレイの肖像』で、100 頁を占めている。」("His story — attractively written, with an easy dialogue and good character studies — has as title, 'The Picture of Dorian Gray,' and covers a hundred pages.", "Magazines and Review")、とこれも大変褒めているが、批評というよりも *Lippincott's* 誌の広告ではないかという印象さえを受ける記事である。しかし、この新聞はそれ以降も一貫してこの作品に対して肯定的な批評をしている。その一方で、同じ日付の *Globe* 紙はこの作品をセンセーショナルな読み物とした上で、作品全体として「ドリアン・グレイの肖像」は「うまく書かれた作品だが、どの点においても芸術的とはいえない。」("is ingenious, but by no means an artistic, piece of work.", "A Superfine Shicker") と総括している。翌日の *Evening Post* 紙はこの *Globe* 紙の記

事を転用したが、この作品を褒めちぎる *Bristol Mercury* 紙の記事は、翌日 25 日の *Derby Mercury* 紙を含め 6 月中だけでも *Dundee Courier* 紙、*Croydon Guardian and Surrey County Gazette* 紙、*South London Press* 紙、*Chard and Ilminster News* 紙、*Driffield Times* 紙、*Exeter Flying Post* 紙などに転用・転載された。6 月 26 日から 31 日まででは *St. James's Gazette* 紙を除いた「ドリアン・グレイの肖像」に関する記事が 9 本しかないことを考えると、新聞各社は当初この作品に概ね好意的であったとも考えられるだろう。

*Pall Mall Gazette* 紙や *St. James's Gazette* 紙の強烈な批判にも関わらず、ほかの新聞社がこのような論調に追従するような兆候はあまり見られなかった。しかし、7 月 5 日の記事では「この作品の構想はよいものの、ある登場人物の皮肉な発言は批判を招くに違いない……多くの人はそのが反論を招くとは思わないだろうが、そう考える人もいるだろう。」("The conception of the story is good, but the cynical utterances of one the characters are sure to raise up adverse critics. ... Many will not see anything in this to cause objection: others will." "The July Magazines") とあり、ヘンリー・ワットン卿の不道德な発言が、この作品批判の矛先に向けられるとの考えを示すが、それは多くの人の考えではないと控えめに述べている。さらに、この作品が「洗練された皮肉家であるヘンリー・ワットン卿は彼（ドリアン）の中に眠る悪魔を目覚めさせるある格言を彼に吹き込む。」("A cynical man of the world, Lord Henry Wotton, instills certain maxims in to his [Dorian's] mind which arouse the sleeping devil in him.", "Items: Personal and Impersonal")、からなる箇所では、ヘンリー卿の不道德な姿勢に言及する。また、このことが彼を悪の道に走らせ、そしてこの作品は、「読者に良い影響というよりも悪影響を及ぼすことから非難される」(... to be condemned as exerting a deteriorating



rather than an elevating influence on the reader.", Ibid) と倫理面での批判がなされている。このような記事は日を追うごとに増えていく。この批判の流れを背景に「これは幸運にも潔癖な批評家の気分を害したことで、間違いなく広く読まれるだろう。」("["S]ince this has been so fortunate as to offend certain purist critics it will no doubt be widely read.", "July Reviews and Magazines") なる箇所から、このワイルドの作品を批判しているのが変わった一部の批評家であるとの認識がこの記事では提示されている。また、ヴィクトリア朝社会の道德観の多様性をうかがい知ることができる文面でもあろう。

このような調子でこの作品に関する批評の記事は賛否両論が続くが、7月22日までにそのほとんどが出揃い、8月上旬には収まる。9月にも記事が若干出てくるが、それらの多くはこの作品のアイデアが盗用されたものであるとの疑惑を *Scots Observer* 紙が取り上げ、若干の盛り上がりがあったという程度である。その件もすぐに落ち着き、雑誌版の「ドリアン・グレイの肖像」に対する批評は終わる。しかし、筆者はどの記事にも目を通したが、*Pall Mall Gazette* 紙や *St. James's Gazette* 紙など一部を除いて、特にこの作品の同性愛的表現について批判する明らかなものを見つけることはできなかった。作品の批判、あるいは作品への非難には、その内容から快樂主義を勧めることを危惧する道德的視点が多いように見受けられる。もちろん、同性愛が不道德のなかに含まれているということは十分考えられるが、その同性愛が不道德性の主だったものとまではいえないだろう。また、"bizarre" "strange" "sensational" "shocking" などの言葉はいくつかの記事の中にあったが、それらも直接ゲイ批判とは結びつけられるものではないだろう。それに、この作品のゴシック小説的な要素を考えれば、ありふれた批評の言葉ともいえるだろう。以上のことから、この作品のその同性愛的要素ゆえに、多くの痛烈な批判にさらされたとするの

は、少し無理があると考えられる。

### 3. W・H・スミスによる拒絶について

ところで、この作品が W・H・スミスから拒絶されたということは定説となっている。Richard Ellmann は 1891 年にこの作品が本として出版された時この書店は "filthy" であるという理由で販売を拒否したという。しかし、その出典元は明らかにしていない (323)。しかし、他の研究者らは、Frankel やワイルドの孫である Merlin Holland の著書を参照し、1890 年の雑誌版「ドリアン・ 그레이の肖像」をそのような扱いを受けたと論じるのが一般的である。それらを辿っていくと、元になったのは *Lippincott's* 誌の販売を請け負っていた出版社のウォード・ロック社がワイルドに 1890 年 7 月 10 日に送った手紙「我々は今朝 W・H・スミスからあなたの物語がメディアから汚らわしいものだと評されているから、売店より回収しなければならないという内容の通知を受けた。」("We have received an intimation from Messrs W. H. Smith & Son this morning to the effect that your story, having been characterized by the press as a filthy one, they are obliged to withdraw *Lippincott's Magazine* from their bookstalls." (Holland, 310) を根拠としている。出典を明らかにしていなかった Ellmann も "filthy" との手紙の一部の箇所を明示していることから、この手紙を参照したものだと思われる。しかし、この手紙を根拠にすることの問題は、実際に雑誌を撤去したとは言っていないということである。ワイルドの作品が掲載されたこの雑誌を回収しなければならないと言っているに過ぎない。英国で駅の雑誌類の販売を支配していたといわれる (Ruth Robins, 91) W・H・スミスがこの雑誌を撤去し、しかも、それがワイルドの作品のためであるとするなら、どこかのメディアが取り

上げてても良さそうであるが、当時のそのような記事は、どこにも見つからなかった。しかし、同時代で言えば、George Moore (1852-1933) が1894年に発表した自身の代表作『エスター・ウォーターズ』(*Esther Waters*)では、その赤裸々な性的描写によってW・H・スミスから取り扱いを拒否されたが、その時は騒ぎとなり *Globe* 紙、*Era* 紙、*Daily Chronicle* 紙などにより多くの報道が多くあったのである。また、この雑誌は6月20日に発売されたとされるが、「回収しなければならない」と伝えた7月10日の通知から撤去したとすれば、20日間程売店に並び多くの人の目に触れたことになる。そして、その時期はメディアから攻撃されていたこの作品が最も話題になっていた時期でもあろう。そのような時に撤去されたとすれば、それが何かの理由で秘密裏に行われたとしても、騒ぎになりそうなものであるが、当時それを伝えた声は皆無である。さらに、6月下旬からは *St James's Gazette* 紙はワイルドと論争の最中にあり、自社のものだけでなく、「ドリアン・グレイの肖像」について否定的に書いた *Punch* 誌、*Pall Mall Gazette* 紙、それに *Scots Observer* 紙などの記事をも引用してしつこくワイルドを攻撃していたのだから、そのような事実があれば飛びつきそうなものである。しかし、W・H・スミスのこの件には一切触れていない。また、1895年4月にワイルドが愛人のボジーの父親相手に起こした名誉毀損の裁判は相手側弁護士がこの作品を取り上げた時にも、販売拒否について言及されることはなかった。ワイルドに敵対していた彼らにとって都合なこの件を彼らはことごとく見逃しているのは、あまりに不自然ではないだろうか。引用した手紙から、W・H・スミスが販売拒否を考えていたことは事実であっても、それを実行したとまでは断言できないし、それを伝える当時の報道が皆無だったといった状況からみても、そのような事実はなかったと考える方が合理的ではないだろうか。<sup>3</sup>

## 結論

1890年の *Lippincott's* 版「ドリアン・グレイの肖像」について英国における当時の反応を見ていくと、再検討すべきだと思われるほどの多様な意見が見出される。当時のヴィクトリア朝のメディアが画一的にこの作品の同性愛的特徴を取り上げ非難してはいなかったということも分かる。作品の内容から、その不道徳さで多くの不評を買ったことは事実であるが、その第一の理由が同性愛によるものだというこれまでの研究は再考すべきであると考ええる。

また、1895年にワイルドが起こした名誉毀損の裁判ではワイルドの人となりを知る不利な証拠の一つとしてこの作品が用いられた。これをワイルドの破滅に大きな役割があったとする研究が多いが、実際のところ、3日間あったこの裁判では、この作品の役割は小さかったと思われる。この裁判の削除されていない記録を彼の孫が出版しているが、「ドリアン・グレイの肖像」が反対尋問に使われたのは、裁判の初日で昼休みを挟んだ数時間、文字起こしした該当箇所の分量は全体の十分の一以下である。ほとんどの部分は、彼が面識のある10人以上の貧しい少年たちとの関係についての質問とその回答なのである。さらに、ワイルドが被告となった2度目の裁判では、裁判官は陪審員にワイルドが「ドリアン・グレイの肖像」を書いたということ判断に組み込まないようにアドバイスしている (Hyde 215)。彼は、あくまで16歳を含む多くの貧しい少年に金銭等を与え性的関係を結んだかどで罰を受け投獄されたのである。彼が仮に現代に生きていて、さらに同性愛者でなかったとしても、多くの未成年者に金銭的援助を行い淫行を繰り返していたとすれば、それによって社会的な破滅を被ったとしても当然である。

注

- 1 例えば、2012年の最新版 DNB (Dictionary of National Biography) のワイルドの項目で Owen Edwards は *St. James's Gazette* 紙と *Scott's Observer* 紙を例に、これらから強烈な批判が浴びせられ W. H. Smith から販売を拒絶されたと述べているし ("The artist as critic, 1885-1891" para 5)、同様のことが、Edwards のようにワイルド研究で著名な Joseph Bristow から、また、大英図書館による紹介文などでも語られている。
- 2 1889年にロンドンのクリーブランド通りで男娼が男を相手にする売春宿が警察に摘発されたが、政府はその顧客だった貴族や著名人の名前が明るみに出ないように取りはからった。このことは政府の動きに反して大きく報道されることとなった。詳しくは H. Montgomery Hyde の *The Cleveland Scandal* (1970) を参照されたし。
- 3 この作品の取り扱い拒否の詳細については拙著 "On the Rejection of Oscar Wilde's *The Picture of Dorian Gray* by W. H. Smith" (近日刊行予定) を参照されたし。

参考文献

- Bristow, Joseph. Introduction. *The Picture of Dorian Gray: The 1890 and 1891 Texts. Vol. 3. The Complete Works of Oscar Wilde*. Oxford: OUP, 2005. Print.
- Edwards, Owen. "The artist as critic, 1885-1891" in "Wilde, Oscar Fingal O'Flahertie Wills." *Dictionary of National Biography*. Web. 7 July 2017.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. New York: Vintage Books, 1987. Print.
- Frankel, Nicholas, Introduction. *Oscar Wilde: The Picture of Dorian Gray: An Annotated, Uncensored Edition*. Cambridge: HUP, 2011. Print.
- Holland, Merlin. *The Real Trial of Oscar Wilde: The First Uncensored Trans-*

- cript of The Trial of Oscar Wilde vs. John Douglas (Marquess of Queensberry), 1895.* New York: Harper, 2003. Print.
- Hyde, H. Montgomery. *The Trials of Oscar Wilde.* New York: Dover, 1975. *Internet Archive.* Web. 7 July 2017.
- "Items: Personal and Impersonal." *Islington Gazette* 7 July 1890: 3. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- "The July Magazines." *Western Daily Press* 5 July 1890: 7. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- "July Reviews and Magazines." *York Herald* 7 July 1890: 6. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- "Literary Gossip." *Globe* 5 May 1894: 6. *British Newspapers, British Library.* Web. 11 Sep. 2017.
- "Magazines and Reviews." *Leeds Mercury* 24 June 1890: 3. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- Manchester, Colin. "Henry Vizettely." Ed. Derek Jones. *Censorship: A World Encyclopedia.* New York: Rutledge, 2001. Print.
- Mason, Stuart [Christopher Millard]. *Oscar Wilde: Art and Morality, A Defense of "The Picture of Dorian Gray".* London: J. Jacobs, 1908. *Project Gutenberg.* Web. 7 July 2017.
- "Mr. Oscar Wilde Again." *St. James's Gazette* 27 Jun. 1890: 5. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- "Mr. Oscar Wilde's Dorian Gray." *Pall Mall Gazette* 26 June 1890: 3. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- "Our Literary Table." *Bristol Mercury* 23 June 1890: 3. *British Newspapers, British Library.* Web. 21 Aug. 2017.
- Platts, John. "Insinuation." *A Dictionary of English Synonyms.* London: Souter

Lippincott's 版「ドリアン・グレイの肖像」に対する評価の検討

& Law, 1845. *Internet Archive*. Web. 15 Sep. 2017.

Ruth Robbins, Ruth. *Oscar Wilde*. Auckland, New Zealand: Continuum. 2001.  
Print.

"A Superfine Shocker" *Globe* 24 June 1890: 6. *British Newspapers, British Library*. Web. 21 Aug. 2017.

"A Study of Puppydom." *St. James's Gazette* 24 Jun. 1890: 3-4. *British Newspapers, British Library*. Web. 21 Aug. 2017.